

『冠導阿毘達磨俱
舍論』と俱舍学
— 古代から現代へ —

要点

筆者は近世・近代の真宗大谷派僧侶が修学した余乗学（浄土教以外の天台、華嚴、俱舎、唯識、戒律、密教などの学び）に着目しており、今回の調査はその一環として行ったものである。

法蔵館が出版した『冠導阿毘達磨俱舎論』（以下『冠導本』）は、近世までの俱舎論研究、いわゆる俱舎学の集大成として評価されている（舟橋水哉〔1940〕、櫻部建〔1995〕など）。

その特徴は、講義・口伝形態を中心とする大寺院に占有的であった従来の俱舎学に対して、『阿毘達磨俱舎論』（以下『俱舎論』）の全編註釈を行い、版本という形で一般読者に普及した点にある。

以下では、『冠導本』の元となる『俱舎論』の内容とその学びの歴史について概観した上で、『冠導本』の特徴を述べる。

『俱舎論』を著した世親について

世親（せしん・天親ともいう・Vasubandhu）の伝記によると、仏滅後900年頃にプルシャプラ（現在のパキスタン）で生まれたという。

世親は、はじめ部派仏教の一派である説一切有部で学び、優秀な学者として高名であった。しかしながら、兄・無著（むじゃく・Asaṅga）の勧めによって後に大乘仏教に転向することになる（近年、世親はもともと大乘の学匠であったとする説もある）。

無著の死後には、大乘経典ならびに大乘論疏の注釈書、唯識論の書物などを著し、80歳で入滅した。

上記のほかにも、世親は『無量寿経優婆提舍願生偈』（通称『浄土論』）を著しているが、この書は法然（1133—1212）・親鸞（1173—1263）によって高く評価された。

そのため、特に浄土真宗においては世親（天親）を「七高僧」として重んじている。

参考：師茂樹〔2015〕

『俱舎論』とはなにか？

世親が著した『俱舎論』とは、説一切有部の教義をまとめて、自身の思想的立場から批判する書物である。

『俱舎論』は初期仏教の教理を理論的・体系的に理解する上で重宝され、以後に大成した大乘仏教においても仏教の基礎学として定着していった。

特に日本では仏教の基礎学として古代から現代まで盛んに学ばれてきた（詳細は後述）。

参考：青原令知ほか [二〇一五]

『俱舎論』の内容

『俱舎論』の内容は多岐にわたるが、経典の語句を理解するために整理し体系化したものである。重要な概念をいくつか取り上げることにしたい。

五位七十五法（人間の精神や物質などの全ての現象の要素をまとめたもの）、六因四縁五果（客観世界や客観的現象まで説明しうる縁起説）、三世実有（過去・現在・未来の法が現在の一瞬・一刹那に存在していること）、須弥山世界、六道輪廻、見道・修道（修行者の仏道実践）

以上が主要テーマの一部である。なお、後の大乘仏教はこれらの体系を踏まえながら、それを乗り越える理論を打ち出していく（そのため、小乗の俱舎を学び、大乘の唯識、天台、華嚴の順に学ぶと理解しやすいと古来から言われている）。

参考：青原令知ほか〔2015〕、佐々木閑〔2021〕

本朝における俱舎学とは？（奈良時代～江戸時代）①

『俱舎論』は唐の時代に玄奘によって漢訳されると、それについての注釈学が盛んになり、ほぼ同時期の本朝（奈良時代）へと伝来した（舟橋水哉 [一九四〇]）。

『俱舎論』とその注釈書が本朝に請来された奈良時代を起源として、南都諸宗や比叡山などの大寺などで盛んに考究される（舟橋水哉 [一九四〇]）。

ちなみに、浄土真宗では七高僧とされる源信（942—1017）、法然なども俱舎学に関する著作を残している。

ほかにも、親鸞、日蓮（1222—1282）、道元（1200—1253）などは比叡山修学中に俱舎学や天台学、密教学などあらゆる仏教を学んだと考えられる。

本朝における俱舎学とは？（奈良時代～江戸時代）②

江戸期になると、南都で俱舎学を修めた真言宗系僧侶によって、智積院や長谷寺においても『俱舎論』研究が盛んになった。

また、浄土宗や浄土真宗の僧侶たちも積極的に真言宗寺院へと赴くようになり、智積院や南都北嶺で得た知識をもとにして、学寮や地方寺院でも『俱舎論』をはじめとする余乗を講じることが通例となる（舟橋水哉〔1940〕、平澤照尊ほか〔2007〕）。

ちなみに、『冠導本』を監修した佐伯旭雅も智積院・龍謙（? - ?）に俱舎学を学んでいるため、智積院系統の俱舎学は泉涌寺にも流入していたと見てよからう。

本朝における俱舎学とは？（江戸中期～明治初期）

江戸中期になると、富永仲基の大乗非仏説、儒者による仏教的世界（器世界）への批判が起こる（柏原祐泉〔1969〕）。

また、幕末から明治にかけてはキリスト教が流入し、明治初期には廃仏毀釈が行われるなど、仏教界にとってかつてない混乱が続いた（柏原祐泉〔1969〕）。

それらの問題に対抗するため、仏教界ではいわゆる護法論が盛んに提唱されるようになるが、そこでも仏教の基礎学である『俱舎論』は重視された（西村七兵衛〔1977〕）。

本朝における俱舎学とは？（明治時代以後）

明治期に大学制度が導入されると、俱舎学をはじめとする余乗は大学の必修科目として設定される（大谷大学〔2001〕）。そのため、所化（学生）が宗派を横断する学びのあり方はほぼ見られなくなっていく。

それに加えて、それまでの漢訳文献のみを対象とした俱舎学とは打って変わり、西洋から流入したサンスクリット・チベット・パーリ文献を用いる原典比較研究が急速に拡大した（櫻部建〔1982〕）

それにより、江戸期までの俱舎学は「前近代的な俱舎学」として権威を失っていったのである（櫻部建〔1982〕）

『冠導阿毘達磨俱舍論』の位置づけ

『冠導俱舍論』を前述した俱舍学史の中に位置づけるとすれば、大学制度が本格的に導入される以前、護法運動や排耶論が活発となり仏教の基礎学が再脚光を浴びつつあった時期に当たる。

なお、当時の仏教界やその他の在野研究者たちに『冠導本』がどのように受容されていたのか、その波及範囲などについては今後の検討が必要となる。

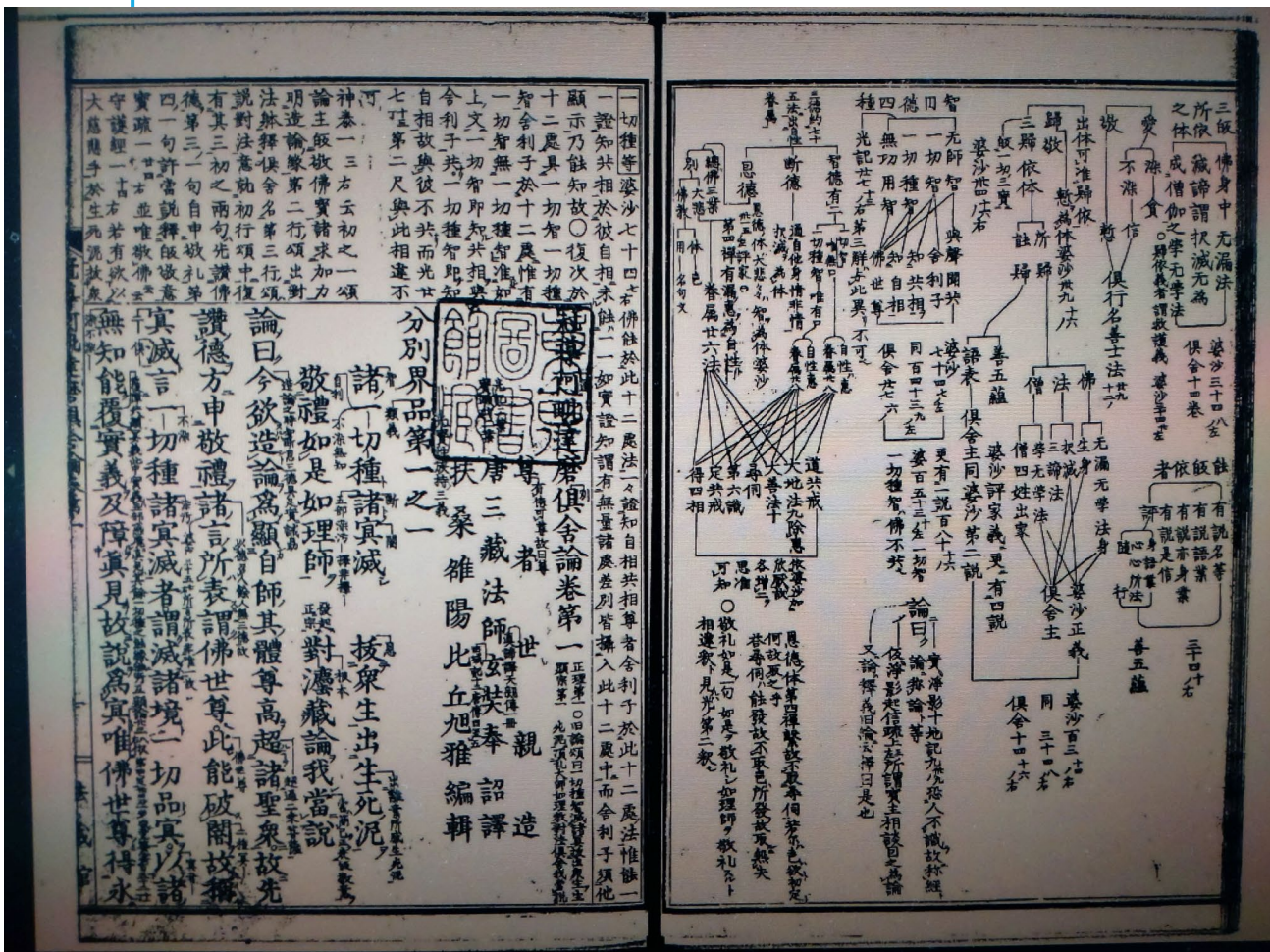
冠導俱舍論の特徴

『冠導本』は、本文横もしくは上部に詳細な注釈を施している点が特徴である（本文に対する「冠」のようにみえることからこのように呼ばれるのだろう）。

注釈の際に参照してあるのは、本朝において重視された俱舍論の二大注釈疏（普光『俱舍論記』・法宝『俱舍論疏』）のほか、「六足論」『大毘婆沙論』『順正理論』などの阿毘達磨文献である。

また、煩瑣な内容の箇所については丁寧な図解が施されており、一見すればその箇所の全体像を把握することができるよう工夫が凝らしてある（写真右）。

これらは『俱舍論』に関する精緻で豊富な知識があっではじめて示すことができるものであり、ここに佐伯旭雅とその門下藤谷慧燈・豊満春洞の見識の深さがうかがえよう。



『冠導本』を編纂した藤谷・豊満の経歴

『冠導本』刊行事業において、佐伯旭雅（1828—1891）を補佐した二人の常随、藤谷慧燈（1859—1896）豊満春洞（1857—1931）の経歴と、その後について触れておきたい。

豊満（旧姓杉原）は、岐阜県斐郡・立齊寺に生まれ、滋賀県愛知郡・宝満寺に養子に入る。

豊満に関しても、膨大な数の真宗・仏教の版本校訂作業に携わっており、『冠導本』以後も仏書に関するその作業を継続していた。

その後、東京巣鴨に新設された真宗大学に奉職する（巣鴨・真宗大学の人事は清沢満之に一任されており、おそらく清沢からのスカウトがあったものと見られる）。

巣鴨・真宗大学はわずか10年足らずで解体され、京都に移り高倉学寮と合併して真宗大谷大学となるが、豊満はそこでも教鞭を取る。

豊満の門下には、近代俱舎学の権威として名高い舟橋水哉（1874—1945）がいる。その俱舎学の流れは、現代の大谷大学の俱舎学へと引き継がれていくこととなった。

参考：英 亮 [2023]

藤谷（旧姓・瀬邊）は、愛知県一宮市・了泉寺から滋賀県長浜市・明楽寺へと養子に入った人物であり、法蔵館ならびに西村護法館などであまたの仏教典籍の校訂に関与した。

『冠導本』執筆後も精力的に出版活動に携わり、『冠導本』からおよそ10年後には天台宗座主・中山玄航（？－？）のもとで天台学を修め、天台の重要な論議について注釈を施した『冠導台宗二百題』を執筆している。この書は天台宗内部でも高い評価を受けていたが、惜しくも刊行直後に藤谷慧燈は37歳という若さで急逝した。これによって、シリーズ化が予定されていたとみられる『法蔵館冠導全書』も第一編のみの制作となったようである。

もし藤谷が存命であれば、盟友・豊満とともに清沢満之（1863—1901）に招聘され、新設された巢鴨・真宗大学の教員となっていたかもしれない。

参考：英 亮 [2023]

終わりに

『冠導俱舎論』は、史上初の『俱舎論』全編の解説書という枠組みにとどまらず、近世から現代まで連なる俱舎学の伝統を考察する上で非常に重要な存在である（冠導本は現在も俱舎論研究者によって活用されているとのことである）

特に大谷派に限って言えば、『冠導本』制作にあたって多大なる貢献をした藤谷・豊満のような碩学は従来全く等閑視されており、その功績を伝える情報もわずかになってしまった（筆者が調査したところ、このような人物は膨大な人数に及ぶ）。

その要因としては、戦後の大谷派内部における近代教学（仏教の論理的解釈よりも、信仰面を重視する教学）の宣揚、もしくは西洋的な仏教学・原典研究の主流化に伴う近世仏教の低評価が挙げられよう。

しかしながら、清沢満之や曾我量深（1875—1971）などのいわゆる近代教学者たちや、南條文雄（1849—1927）、佐々木月樵（1875—1926）などの西洋的な仏教学を学んだ人物たちも、その学的基盤は近世仏教にあることは疑いない。

今後はそういった歴史から消失した人物・事柄を拾い集めることによって、近世・近代の仏教史における新たな側面を浮かび上がらせることができると筆者は考えている。

参考文献

- 青原令知ほか〔2015〕『倶舎 絶ゆることなき法の流れ』（自照社出版）
- 大谷大学〔2001〕『大谷大学百年史 資料編』（石田大成社）
- 柏原祐泉〔1969〕『日本近世近代仏教史の研究』（平楽寺書店）
- 櫻部建〔1982〕「近代仏教学ということ」（『大谷学報』62-2）
- 櫻部建〔1995〕「新たに説一切有部を志す人のために」（『仏教学セミナー』61）
- 同 〔1999〕「大谷大学の倶舎学の伝統について」（『仏教学セミナー』70）
- 佐々木閑〔2021〕『仏教は宇宙をどう見たか アビダルマ仏教の科学的世界観』（DOJINBUNKO）
- 西村七兵衛〔1977〕「ひとすじの道—聞書・四代目西村七兵衛の歩み」（『仏教書出版三八〇年』所収）
- 英 亮〔2023〕「藤谷慧燈と余乗学—『冠導阿毘達磨倶舎論』と『台宗二百題』の編纂—」（『真宗文化』27掲載予定）
- 平澤照尊ほか〔2007〕『新義真言宗の歴史と思想』（ノンブル社）
- 舟橋水哉〔1940〕『倶舎の教義及び其歴史』（法蔵館）
- 師茂樹〔2015〕『『大乘五蘊論』を読む』（春秋社）